

文明と古典語研究

二十一世紀の世界の課題

ジャン＝ピエール・ルヴェ
(リモージュ大学)

西暦二十一世紀に入ろうとしている今、新しいグローバル化した世界が構築されつつある。そのなかで、東西の古典語研究はどのような役に立つかを考えてみたい。

ある人達はこの研究の有効性を強く否定し、言語研究者を、決定的に過ぎ去ろうとしている過去の文化の人と見なす一方、ある人達は逆に、その文化の伝達者ならんと欲している。しかしその研究が正確にどのようなものであるべきかについて彼らの意見は必ずしも一致しているわけではない。これはおそらく彼らの物事の知覚が偏りすぎているからであり、この知覚が現在の知と社会の変化にもはや順応していないからである。

さて、まもなく始まる世紀の現実を心に思い浮かべつつこの

問題を再考してみたい。

これはたいへんな作業であるが、本考察はこの問題の基本的な輪郭を描こうとすることである。この考察は人間文明の状況つまり、現代文明の未来状況を提示しているある最近の書物を援用する。この本とはサムエル・ハンチントンの「文明の衝突」*The Clash of Civilizations* (1996、仏語最新版 *Le Choc des civilisations* 2000)である。

こゝとして客観的事実として認められるある状況を思い浮かべ、人類知というような新しい概念を考え、現代性のさまざまな側面につながる重大な文化的危機を思い、さらには地政学上のユマニスト的理想の道を定めることとする。この理想については、

ギリシャ文学の「オデュッセイア」第三歌にあらわれるネストールの姿として現代まで伝わっている、西洋の最古の賢人の人格に言及して結論とする。

すぐれた近著、「世界空間地図」(1996)のなかで著者ジャン・ゲレックは現代世界の地政文化的問題に重要な一章をあてた。彼の分析は根本的な議論は欠くものの、サムエル・ハンチントン説を大いに援用している。彼は当然のことではあるがその説に大きな興味をよせこう述べている。「この議論の長所は世界空間研究の中心に文明の概念を再導入していることである」。ゲレックは現行文明と、これに先行した文明のリストを提示している。その数は容易に縮小することができ、しかもそうしても現実を変えることにはならない。というのは、西欧文明と呼ばれるものは直接的にしる間接的にしる、ギリシャ・ローマ文明のみならず、メソポタミア、エジプト、近東、クレータおよびビザンチン文明を引き継ぐものでもあり、また一方、ロシアや現代ギリシャが西欧的なのか(ギリシャ)正教徒派的であるのかというような問題はかならずしも適切な問いではないから

だ。
こうしてみると、三つの大集団しか残らなくなる。すなわち、東洋(インド、中国、日本)文明、西欧文明、それに文化伝承が主に口頭でなされるさまざまな民族文明である。(西欧の古代には存在しなかった七世紀以降のイスラム文明をルヴェ氏は、ヨーロッパ・地中海文明のなかに含めている 補遺参照。

訳者注。

「西欧」(Occident)と言うとき、ゲレックは単数 la civilisation occidentale を用い、「西欧」と「西欧キリスト教世界」とを同一化しているが、これはいくつかの理由から問題がある。キリスト教は実際「西欧」に限られるわけではない。目標が普遍的であることは明白であり、これはキリスト自身によっても確認されているが、福音書(マタイ伝 28:16 マルコ伝 16:15)及びキリスト教二千年の実際においてもはっきりと見てとれる。一方、ゲレックならびにハンチントンによって「西欧文明」と呼ばれているものには、本来のキリスト教の価値観とは漠然と、あるいは明白に矛盾する点がある。

つまり「西欧的」とみなされているものの実態は、より古いヨーロッパ・地中海文明の現代的、ヨーロッパ・アメリカ的な変形にすぎない。古・ヨーロッパ・地中海文明の構成は今述べた要素が、聖書および教父の伝統によって補完されたものから成り立っている。ある種の普遍的形態はこうした伝統のなかに見いだされる。

ハンチントンは「イスラム文明も(正教会文明も)古代文明の遺産を受け継いでいるが、西欧が受け継いだものとは比べ物にならない」と賢明にも指摘している。一方ロシアの「正教」と呼ばれている遺産は、その根本においては、ヨーロッパの他の国の遺産と同じものである。ハンチントンが立

てた区別によれば、彼は「西欧的、キリスト教的」と「アメリカ的」とを同一視しているように思えるが、この混同はもとよりばかげていて、政治的にも哲学的にもきわめて危険、有害である。(ルヴェ氏注)

理由を検討してみたら面白いだろうが、ここでは分析はしないけれども、ヨーロッパ・アメリカ文化は、自己の存在を確かなものにしよつとして、ヨーロッパ・地中海的起源から離れ続けてきた。そしてそうすることによつて、この文化は世界の他の文明、すなわち東洋および口承文明と根本的に違つものとなつてしまつた。實際この文明は他の文明が保持できたもの、すなわち知恵本来の形態を失つてしまつてゐる。知恵の概念を定義することは容易であると同時にかなりむずかしい。長広舌をふるうつもりはないが、真善美を同時に探究することにより人が心の平和に導かれ、他人を絶対的に尊重することのなかで幸せに導かれるときこそ、知恵がはたらいてゐるといふことができるだろう。

もしこれから世界で、まだ知恵そのものであるいくつかの文化と、文化価値の俗化の過程と誤解とのなかで故意に本来の知恵を放棄してしまつた文化との間に対立が起こるとしたら、それは不可避的に衝突になる。その衝突の後には知恵の自閉症か、またはこれらの知恵が、画一化を助長するグローバリゼーションの展望の下、「西欧的」と言われる文化に「右に倣え」して

しまつという事態が生じるだろう。

ゲレックは、現代は大きな野心の実現にふさわしい時代であると考へてゐる。その野心の本身は、この星の大文明の生命に基ついた一つの地球文明を構築することである。しかし事態がもし今述べたように展開するなら、この立派な企ては実現されることはないだろう。といふのはこの文化の建造物はさしあたり、これまでのいくつかの大文明ではなく、そのうちの一つ、しかも衰退して生気を失ひ、歪んでしまつた形態の文明を唯一の土台として建てられるからだ。地上のあらゆる知恵は補完性をもつとした場合(これは不和や無理解、またさうした不幸と無知の表明に満ちた悪魔の行列を十分被えるだけの強さをもつ考へだが)、情報技術や生活のグローバル化によつてなにか生まれてくるかもしれない。しかこうした土台のおかしな建造物が建てられてしまつと、新しい世紀になつてもそのなにかが人間にもたらされることはないだろう。

現代はゲレックによれば、決定的選択の時代である。「十九世紀は国家によつて、二十世紀はイデオロギーによつて支配されたが、二十一世紀は文明によつて支配されると考へるのは単純すぎる。世界では一体なにが起こるかかわからない」。まだすべて可能なのは不可避的なことはまだなにもなされてないからだ。破局は一つの政治行動でまだ回避されつとハンチントンは考へてゐる。「もし世界の指導者が世界政治の多文明性を認め、力をあわせてさうした事態を維持しようとするなら、わ

われわれは異文明間の全面戦争を回避できるだろう」。しかしこの計画を実現するためには、指導者がさまざまな人間の文化のなかに、こうした政策の立案と遂行のため都合のよい状況を見いださねばならない。

その状況は一体存在するのだろうか。どうしたらそれが現れるのか。その方向に行動できるものは誰だろうか。

こうした疑問に答えるために、いくつかの実際の条件を検討してみよう。

文明というような広漠とした実体を考えるとき、われわれは歴史的経験から、「人々の間の大きな違いはイデオロギーでも政治でも経済でもなく」、それは根本的には「文化の違い」であることを知っている。ところで一つの文明とは「大きな意味での文化」であり、「文化的な実体」である。それが他の文明に敬意を払うことができるのは、集合して知恵となつたその初期の理念にその文明が忠実である場合のみである。したがって、文化の交流が繰り返された場合、ある文明が他の文明の知恵とは一見相容れないような自己の知恵を放棄せずに、一つの世界文明の創造に貢献することができるなどということは考えられない。この文明は他の文明と一緒に融合する過程ではなく、いま述べた真の補完性を認める過程で自己の文明を凌駕しなくてはならない。生活条件の発展はすべてのごとに好都合だ。しかしハンチントンが的確に述べているようにすべてがうまくいくとは限らない。つまり「現代社会間の交流が増大するおかげで

技術や発明、および社会間の慣行が、伝統的な世界では不可能だった速度と程度をもって変化するが、共通の文化は生まれてこない」。したがって世界的な門戸開放のはずみがつく一方で、真の世界文明の構築に貢献することには遠く、技術の進歩によって重大な紛争の危険が生まれる。「今後世界中で文化の分野ではますます差異が大きくなる。つまり、異なつた文化集団の間での紛争がますます重大となつていく」のだ。

こうした危険はどうしたら被いのけられるのだろうか。大文明は本質的にあるがままに存続する必要がある。つまりヨーロッパ・地中海世界の伝統の世界がそうであるように、必要なら、諸文明はそのよつて立つ知恵の理念を十分認識し、自己がいかなるものかを再発見し、そして互いを知り、そして互いを補完的なものとして認め合うことを覚えなければならぬ。つまりは、こうしたことはすべて若者の世代に、その学業中に教えられるほうがよい。

しかし、実際こうしたことを教える人間は、全人類の知の財産の要点を伝達する古い言語、文明の言語を研究している専門家を除いて他にない。

二十一世紀のユマニストは文化的に限られた分野に自己を限定してはならない。自己の任務に忠実であるとするなら、全世界の次元に活動分野を広げる義務がある。東洋においても西洋においてもその任務は重い。しかしその任務は西欧と東洋とは違う。

ハンチントンの言うことを信じれば、東洋では現在、過去から引き継いだ文化の復興がなされていて、それが西欧から来たものを忌避したいという気持ちを引き起こし、ユマニスト的思想の細分化につながっている。「こうした復興は、アジアのそれぞれの固有の文化的アイデンティティと、西欧文化とは異なるアジア文化の共通点とを強調することによって目立つものとなっている」。こうした事態を前にしても、全体として世界へ自己を開くことの必然性を理解する努力は絶対に必要である。というのは、こうした努力によってこそ違つた道を歩む文明が互いに補完性をもつかどうかを認識できるからだ。

こうした努力を生じさせるにしろ励ますにしろ、西欧は具合のよい位置にあるわけではない。西欧の持つ自己のイメージは「陰りを見せはじめた文明」というイメージである。この衰退は、ハンチントンのすぐれた観察が示すように、さまざまな形で現れている。「モラルの低下、文化的衰退は(……)西欧にとつて経済や人口問題より重い意味をもつ問題となっている」。西欧の知恵をつくりだしていたものの意味が失われることのほかに、西欧文明の現状を経済が支配することから生じる結果が加わっている。「西欧人は自分たちの文化とは、食器洗剤、色あせジーンズ、あるいは贅沢な食べ物であると思ひ込んでいるが、これこそ西欧の本質を表わしているものだ」。二十世紀の歴史のなかで、人工的に作り上げられていたヨーロッパを二つに分ける障壁の一部が、この十五年の間の政治的事件で消滅し

てしまったが、双方を非常に強く結んでいる文明のすべての絆はこの数年間ではまだ結び直されていない。たしかにこの絆は千年まえからゆるんでいて、さまざまな予想外のできごとのおかげでその真の性格は隠されているが、アメリカ的な感性のハンチントンはこの性格を分かっているのではないようだ。彼は「古典の遺産といつても、ロシアではビザンチンを通して伝わったせいで、ローマから西欧に入ったものとはだいぶ違うものとなった」と述べ、ギリシャは西欧の重要な起源であることを認めながらもギリシャを「西欧文明」から排除しているのである。

つまり西欧のユマニストはまず第一に、真のヨーロッパ・地中海文明とは何かを思い起こすことに専念しなければならない。このためには、ヨーロッパ・地中海文明をいわゆる西欧文明と同一視することは一つのまやかしであり、錯覚と衰退を生むものである、というような誤謬を打破する仕事と、ギリシャの遺産(この中には、近東の遺産の一部が含まれている)とローマの遺産とは結局は同一であることを示す、というような再構成の仕事を行わねばならない。この同一性を再構成することにより、後に述べるように、西欧の真の知恵とはどのようなものであったかが明らかにされるだろう。その後にはじめて、世界の種々の知恵の必然的補完性が理解されることになるだろう。

これに関係する問題がきちんと、つまり、地球の諸文化の言葉ではなく、地球のさまざまな知恵の言葉、したがってある意

味では人類の文明の言葉、というのは「世界がつくりあげているものは一つの同じ普遍的文化である」と言うとき、単一の文明、という発想が生じる」からだ、こうした言葉で提示されたときに、この「文明は互いに補完する」という発見は自ずと、言わば自然に認められることになるだろう。知恵は普遍文明を作り上げながら、人類全体の文化的アイデンティティのもっとも高尚な部分を表現しているのだが、普遍文明とは、よく考えてみると、こうした知恵を通じてかいま見られるのである。というのは、「文明とは集団のもっとも高尚な形態であり、人類が他種族から違えるために必要とするもっとも高度な文化的アイデンティティである」からだ。

こうした理想的方向で構築されるすべてのものはユマニスト達の文化的活動によって構築されるほかない。この分野ではコミュニケーションの発展に期待できるものはなにもない。ハンチントン氏は次のように理解している。「しかし地球的規模に広がる通信手段が現れたとしても、実際にいかに、態度や信条が顕著に一つにまとまるということにはならない」。また地球規模の交易からもなにも期待できない。というのは「交易や交流がいくらか密になっても平和や共通の感情は生じないことは、社会科学の示す結果と一致している」。

もっと悪いことに、その存在が無益であることは明らかなく、こうした補助手段は、世界知の構築計画を遅らせるだけでなく、不可能なものにしてしまう性質(たち)のものだ。「とくに文明

的、社会的に高度な相互依存を示し、さらにこの現象を意識することを特徴とするグローバル化の進む世界では、文明的、社会的さらには倫理的自己意識が強まる」のである。

一方、技術的進歩によって人は、膨大な量の情報に接することができ、それが真なのか偽なのか、知恵なのか単なる意見なのか、本質的なものなのか付随的なものなのか、通知なのか情報なのか、確かなものか不確かなものかを区別する方便をこの技術は与えてくれない。つまり、この技術は考えることを教えてくれないばかりか、知的怠惰への邪悪な誘惑を生みだす。入手可能なあらゆる情報が自分の手元にあるとしたら、考えることは一体有効な作業なのか。手元に利用可能な情報がふんだんにあると思いきみ、また、たとえ本当の意味で制御できなくとも、情報を簡単に操作できると思い込んでしまうと、精神に生まれる危険を否定することはできない。したがって知識習得のためにはこれまで以上に知性を育て、知恵を教えることが第一に必要となる。

真偽の境が、人の生活に普段備わっている現代の通信手段によって意図的に破壊されているからこそ知恵の教育は一層必要である。パーフォーマンスにみちた弁舌で人は説得される。内容が事実にも則しているかどうかはどうでもよい。大事なものは、自分に都合のよい意見にすぎないものをその弁舌で勝利させることなのだ。

この憂すべき事態は西欧に固有の事態でも東洋に固有の事態

でもない。これは世界的なものであり、避けられない方向を映し出している。これこそ、語のもっとも高貴な部分が失われても強力な反作用がないかぎり「文化」と呼ばれ続けるもの、が普遍化されるということなのだろう。

世界はこれまで以上にユマニスト的な教育、過去から引き継いだ知恵の源泉を利用した教育を必要としている。

ところでその源泉からどんなものを汲み取るべきだろうか。

まず、サンスクリット、中国語、日本語、ヘブライ語、ラテン語、ギリシャ語、あるいはほかのどんな古典語で書かれたものであれ、知恵が示されている古いテキストを教えるということがまず最初の要点である。ここには昔からの言葉の教えがある。

またべつの形態の言語研究にも大事な補足が求められる。現代まで伝わった文字作品は人類の歴史全体から見ると決して古いものではなく、多くの文明のほんの一部にしか対応していない。口承伝承(これはわれわれに残された文献よりもおそらく古いというわけではないが)よりも古い、人間の別の記録があるだろうか。

この答えを求めようとしたら、同起源であろうがなかるうが、地上のさまざまな言語を構成している語を比較してみるとよい。語の変化、また言語的しるしである語の抽象概念をあらわすイメージを比較してみると、そこには自然や生活の現実を前にした人間のあらゆる経験、私が「原始の知恵」と呼んだものが秘

められている。これこそ、古典的な言葉の研究と並んで、世界に広がったユマニズム研究に加えられるべき新しい学問である。

こうして述べてきたが、西欧の知恵、前に言及すると予告していたネストールという、ホメーロスの人物の知恵からずいぶん協道にぞれてしまった。

西欧の一つの知恵を話題にすることは奇妙に思えるかもしれない。というのは、西欧の古い伝統に現れる多くの知恵とは、例えばソクラテスの知恵とかストア派の知恵といったようなものである。一方、異教的遺産とキリスト教的教えの合流点には、「知」(ソフィア)とが、「哲学」(フィロソフィア)と呼ばれる知の定義があり、これは中世の学者の間では、「全てのものの真実の把握」(omnium rerum comprehensio veritatis)という形で見いだされる。I J B Omnium (全てのもの)はhumanarum (人々の)とdivinarum(神々の)を表わしていた。つまり倫理学を含むいろいろな科学、現在哲学と呼ばれるもの、靈性に属する部門、神学からなる知のあらゆる分野を表わすものであった。すべてのヨーロッパ・地中海的伝統によって練り上げられた知の概念がこれである。まず諸科学が展開され、それから科学と哲学が分離され、ついには俗化していく過程で、精神的なものをその他の、知の埒外に置くこととする意思が働く。こうしたことによつて「知恵」が次第に忘れ去られるのだが、この「知恵」に対し、現在の変化はすべて逆らつて働いている。というのは、科学は絶えず多様化し、知恵の解体の要因であるとされる他の

二つの動き（科学と哲学との分離、俗化の過程）は拡大しているからだ。

西欧思想の不幸はこの知恵の代わりに、偽りの知恵、多かれ少なかれ不吉なイデオロギーを導入したことだ。そしてその代用品が現在破綻してしまい、その結果経済力だけに支配される勢力が跋扈（ばつこ）している。これに対し政治権力はおさえがきかないし、きかせようともしない。こうしてヨーロッパ・地中海文明はハンチントンの言う、現在の西欧文明に移行してしまつた。

この動きはもはやもとに戻らないのだから。もしそうだとしたら、西欧ではユマニスムは崩壊したことになる（ヨーロッパの権力者が、古い伝統の唯一の名残である古典語教育をたえず縮小し続けていることは理由のないことではない）。しかしこの知恵の状況は困難であるとはいえ、絶望的だというわけではない。我々は実際いま、世界化の時代という、人類史上の新時代のあけぼのに位置している。十三世紀にロジャー・ペーコンは、著書「大全」のなかで、人間生活の新時代の到来を支配するものがこの知恵であることを示した。十三世紀はそういう時代ではなかったが、こうした見方は我々の時代にとって予言的な意味をもっていることがわかる。これから文化の真の世界化が普遍的知を中心にして生じてくるなら、この知恵こそ西欧の貢献できるものとなるだろう。そうしたあかつきには神的、人的あらゆるものの背後に、科学に制御された現実の姿と並ん

で、哲学的、宗教的あらゆる知の神が現れるだろう。そしてその結果招来されるユマニスムは私が以前「四道」（明治学院仏文論叢「1991,1993」）について語ったときに想い起こしたもので、からそうかけ離れたものではないだろう。

現在の現実からみて、これはユートピアかもしれない。しかし文明の「衝突」などと言う言葉に恐怖心しか覚えないユマニストは、そうしたことが起こらないような提案をすることが義務であると考えたのだ。もしこの「衝突」が不幸にして起こるとしたら、これはいま見たとおり、コミュニケーション（相互理解）に関する現代の詭弁家の圧力の下、真実に対する愛とは誰が見ても切つても切れない仲である、真の自由への欲求が失われる事態と同時進行するだろう。こうした点では、各自の運命は人間全体の運命とつながっているのである。

現在「オデュッセイアー」の最初の巻（現在第四の歌）の翻訳に従事している日本の模範的ユマニスト達を横目で見ながら、ネストールについて一言いつて終わりにしよう。

西欧文学の伝統でネストールとはおそらくその人物を通して、西欧の思想がどのようにして、いつごろ東洋の思想とその共通の起源とから離れていったかがわかる人物である。この人物はある伝統の終わりともう一つの伝統の始まりとに位置しているからだ。彼を形容する語（真実の、率直な、公平な、信義に厚い、等という意味のギリシヤ語 *alēthes*）と、特に文脈（第三の歌）とに關係させて言えば、彼は「オデュッセイアー」の第三

の歌の二百五十四行目でテレーマコスに言った言葉を、今の世界のすべての若者に繰り返して言える、「世界の知恵」の巨匠、ユミニスムの巨匠かも知れない。彼はこう言う。「そうだ、実際わしはおまえに、それがどのようして起こったか、おまえ自身でとっくり考えることができるよう、ありのまま残らず真実 (althea panta) を話そう」。

古典語と世界の知の研究とを発展させることは実際、これからの世紀にとつて、世界的重要性をもった文明の課題であることを、こうしたことはすべて示している。

補遺 ヨーロッパ・地中海文明のために

いまこの文を読まれた方は、ハンチントンが何ページにもわたって展開したイスラム文明がほんの少ししか言及されていないことに驚かれたかもしれない。

これにはほんの短くしか述べなかつたが大きな理由がある。それはイスラムの基盤は実はヨーロッパ・地中海圏にあるということである。

イスラムの初期の伝統であるアラブ・ペルシャ的局面の哲学においては、ギリシャからの遺産が根本的な位置を占めたと言うエチエンヌ・ジルソン (1884-1972) の指摘はまったく正しい。彼はこう言っている。「アラブの哲学はアリストテレス哲

学の延長であるとするのは不正確だ。逆に、アリストテレスの思想は結局、プラトンの哲学と矛盾しないと確信したアラブ人は、一生懸命両者に折り合いをつけようとした。アラブ人はその上、西欧人と同様、宗教 (イスラム) をもっていたのでこれを考慮せねばならず、それが彼らの信条に影響を与えないはずはなかつた。旧約聖書の神と同じように、コーランの神は唯一にして永遠、全能であり、万物の創造者である。(旧約のアラブハムとイスラムのイブラヒムは同一人物 訳者注)。アラブの哲学者達はしたがって、存在と世界についてのギリシャ的概念と聖書的概念とを両立させるといふ問題に、キリスト教徒より先に遭遇した」。

確かにいま述べた歴史的現実により、ハンチントンの「宗教の衝突」と呼ぶものが現代世界において本当に排除されてしまふわけではない。しかしこれらの現実を思い浮かべ、そして特に、もし神学的考察には関係なく起こりうる衝突の可能性が増大したとき、自分達は皆、広大なヨーロッパ・地中海伝統に属しているのだという明確で共通の意識をもって、すべての関係者がこれらの歴史的現実を受け入れることができれば、文化の激しい衝突は避けることができるだろう。

不幸にして衝突の兆候は感じられ、そして時には劇的結果を引き起こしているが、その発現を防ぐためには、西欧が、自己の文明・文化のギリシャ的、近東的基盤を力強く再発見する術を知り、「傾きつつある文明」というイメージを払拭せねばな

らないだろう。さらにこの遺産を一握りの専門の人だけではなく、すべての人に伝え知らせることを存在理由にしている学問（古典語研究）によって、ラテン・ヨーロッパならびに古代アラブ・ヘルシャ圏のイスラム諸国の共有財産に、ごく自然な形で、重要な位置が与えられる必要がある。古典ギリシャ語の偉大な原典の今日までの伝わり方には、直接間接の二重の伝統があり、その伝統にシリア語やアラビア語のようなセム語を話す学者が参加していたことを忘れてはならない。

できるかぎり広く考えると真のヨーロッパ・地中海文献学の役目とは、キリスト教国、イスラム教国に十世紀以上も前、同時に発展し、アル・キンディ、アル・ビルニ、アル・ファラビあるいはアビセンの如き偉大な思想家達に、アリストテレスを最高の哲学者と呼ばせるようになった、共通の基盤をもつこの知恵の示すものを受容することである。

したがって、ヨーロッパ・地中海全体に、もしその意思があるなら、宗教から一部独立したこの真の知恵を中心として、一種の文化統一体をうち立てることができたらう。

これが確認されたら、(イスラムといわゆる西欧との間に)非常に重要な実際上の違いが認められなくなると言うわけではない。こつした違いは東洋の知恵(インド、中国、日本、その他の知の形態 訳者注)の間にもある。こつした違いを内輪に見積もったり、否定したり、また、単に包み隠すことはばかげて無益、危険なことであり、知的には不正直なことである。

ヨーロッパ・地中海文明の統一性を思うことは、西欧にとつてさしあたり、自己の文明が生まれたときのギリシャの占める位置の理解を深め、自己が本質的にヨーロッパ・地中海であることを認めることにつながる。

この必要性は古典語のユマニストたちは十分承知している。しかし自分たちは古代の遺産である複雑な形の台座をもつ文化の擁護者であると名告ってみても、いまの人はそういう人の話を聴く耳があるのだろうか。

先に分析したようなグローバル化した地上全体での古典語研究という世界的課題には、西欧においては、いわば以前から多様で複雑なヨーロッパ・地中海的課題が関わっている。以前、部分的すぎる形で急いで言及したのはもちろんものごとのこつした側面だった。知らずにか、あるいはいま流行りの偽りの価値観にひかれているのが、多くの人が理解しようとも、受け入れようとならないものとは違つた実に多くのものを、急速にできあがりつつある二十一世紀の世界に古典ユマニスト達はもたらすことができるのである。

もし不幸にも、このことが緊急に理解されなかつたり、あるいはまた、もつと悪いことだが、尊大にあるいは現代特有の熱、盲目、傲慢、蒙昧、真の情報の欠如、誤算、あるいは単に軽率に、理性からのこの提案がはねつけられるなら、つぎのようなことを恐れねばならないだろう。つまりいたるところで、またすべての人に不幸なことに、一か所ではなく多くの場所で文明

の衝突が起こり、文明内部、あるいは文明間の対立が生じる。これは、全ての人に共通であり、真に人道的と形容できる財産である。「世界の知恵」の数千年からの文化の伝言を聞かせよう人々に注意が払われなかつたせいである。

(訳・工藤 進)

訳者あとがき

この文はリモージュ大学のルヴェ教授が「言語文化」の今回の特集のために寄せた仏文を、注抜きで本文だけ日本語に翻訳したものである。内容が現代の古典語教育の危機を反映したものであり、日本の大学における英語以外の外国語教育の危機と通底したものが強く感じられたので日本語に直すことにした。

「言語文化」は日本語読者以外にも読者がいるのでフランス語もそのまま載せた。

ルヴェ氏は現在五十台の中頃。パリ大学ナンテール校から始まった彼の教授生活は、普通の人とは逆のコースをたどり、故郷のリモージュに落ち着いて二十年以上になる。この大学では最古参の教授の一人である。学内では長く学部長代行をつとめ、今年の選挙で学部長に推されたが固辞し、学内に「先史時代祖語研究所」を作つて所長になつた。この研究所はフランス国立科学研究センター(CNRS)の予算枠に入っている。彼の専門

はギリシャ語を中心とした印欧語比較研究だがラテン語、ゴート語、スラブ語、サンスクリット語、それに中世科学史、宗教史といった具合に講義の幅は驚くほど広い。博士論文は最東端の印欧語、トカラ語に関するもの、印欧語世界における「真」(まこと)の概念について、それにフランスにおける古典語教育史の三本がある。コレージュ・ド・フランスではギリシャ語文献史のイリグアン教授にかわつて講義をしたこともある。

敬虔なカトリック信者である彼は、外国からの留学生、とくに日本の明治学院大学からの留学生の世話を、聖人のような無私の姿で務めて下さるのには本当に頭が下がる。彼の古典語・古典思想の講義は人気があり、百キロ以上も離れた町から、ただ講義を聴くだけの聴講生が毎年何人もくる。学生時代の彼は背が高くやせていた。しかし彼は二十一歳ですでにアグレガシオン(教授資格試験)に受かつていた。今はすこし太つて實禄があり、昨年までフランス古典語教育学会の会長を務めたが、すべての会員から敬愛されている。彼は昔から印欧語族の「知恵」の原始形態について興味をもつていた。この文の最後にてくるホメーロス中の人物、ネストールは彼にとつてこの知恵の形態をもっともよく表わす人物である。彼の父はリモージュでは有名な郷土史家だが、母上には百歳を越えた母親がいた。この祖母は南仏語を話したが昨年百四歳の生涯を終えた。島崎藤村がリモージュに着いたころ十八九の娘だった彼女は、「エトランゼ」にてくる「ほの暗い礼拝堂でひざまづく黒衣の

若い女」に似ていた。

ケルト的伝統がかすかに残るこのリモージュの、古い価値観を代表しているのが親友ルヴェ氏である。文中、彼は現在の情報手段をあしざまに言っているが、実は彼の部屋は本と情報機器であふれている。コンピュータを駆使する彼はコンピュータに使われることを嫌う。

彼の情熱は今から三千年も前のホメロス時代の人間の「知恵」、現代ではほとんど失われた知恵を今の若者に伝えることである。西欧の衰退は西欧が本来もっていた知恵から離れてしまっていることから来ていると彼は確信している。こうした考えが今の日本の若者に伝わるどうかわからない。しかし、フランスでは、たとえ若い人の感性であっても、この価値観には反応するものがあるらしい。スラブ文化もイスラム文化もキリスト教文化も親を同じくする姉妹であるという考えは、差異を強調するモデルニテの説とはまったく違う。クロード・アレーグールという古典の言語にも文化にも理解がない現代の合理主義者が文部大臣をやっていた昨年まで彼は悲しい顔をしていた。ジャック・ラングにはすこし希望をもっている。この文末はほとんど怒りの脅迫文である。

二千年紀の秋、リモージュ大学の古代研究部門に「先史時代祖語研究所」(以後「祖語研」と略称)が設立され、所長にジャン・ピエール・ルヴェ教授が就任就任することが七月四日の同

大学評議会で決定した。同研究所は国際的なものであり、「フランス」国立科学研究センター(CNRS)の予算配分を今後四年間単位で受けることとなった。

今年の七月、日仏間で協議決定した「祖語研」研究チームの目標は次のとおりである。

- 1 特にグリーンベルク(J. Greenberg)、ボンハート(A.R. Bonhard)、ドルゴボルスキー(A. Dolgopolsky)といった学者の著作に定義されているような、広範囲の旧世界・ヨーロッパ・アジア地域の祖語の総体を研究対象とする。
- 2 旧世界あるいはヨーロッパ・アジアの祖語体系の仮説と、この仮説から存在が想定される先史語についての研究を厳密な科学的精神をもって行う。
- 3 既知の語族、祖語の系譜、またはそれを越えた言語の系譜の基にあるような言語、そしてまた言語の想定域がヨーロッパ・アジア・旧世界地域であれ、その外であれ、再構成されるあらゆる祖語に、同じ方法論でもって関心を示す。人間遺伝子学の最近の成果によれば、深層共時性の比較に関する研究分野は理論上無限である。
- 4 ある事実を発見し、これを知覚と思考による認識とによつて理解するとき人間は知恵を体験する。こうした知恵を反映している「原始の知恵」の中身はどのようなものか。これを言語研究を通じて明らかにする。
- 5 世界の文化遺産においては、東洋文明であれ西欧文明で

あれ、文字によるものであれ口頭伝承であれ、あらゆる人知は相互補完の関係にあることを見いだし、証明するための言語学を推進する。

6 PUJIM(リモージュ大学出版)発行の日仏共同誌「東西」、あるいはこの研究誌の特集号に研究成果を発表する。

7 人類の地理的細分化によってさまざまな祖語が発生した多様化の過程を理解するため、遺伝子人類学の研究者と密接に協力を保つ。

8 研究所設立以後は、遺伝子人類学の研究者(国立科学研究所センター・マルセイユ地中海大学のジル・ペーチュ Gilles Boëtsch氏、モルガーンヌ・ジベル Morganne Gibert 夫人の研究チーム UMR 6578)と学際的チームを形成し、中、長期の研究計画を共同で決定する。

9 ヨーロッパおよび日本の所員間の研究交流は、特にインターネットを用いて増大をはかる。各々の分野で定まった評価を有し、本チームの方針に関心をもつ世界中の通時言語学者に新たな協力を懇請する。

リモージュ 二〇〇〇年七月三日

(リモージュ大学)ジャン・ピエール・ルヴェ

(明治学院大学・リモージュ大学客員)工藤 進

(「東西」の既刊は三号、二〇〇〇年十一月に四号、二〇〇一年四月に五号の予定)